

うわさに ついて の 研究

植 田 江 津 子

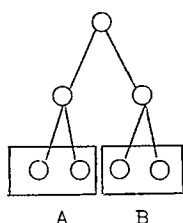
私たちはなにげなく友達などと、ある個人をとりあげ話題にして話しをしている場合、又、近所の奥さま方も井戸端会議と呼ばれるものの中で、近所でのかわったことを取り上げ話題にしている場合が多い。そして、現代多くの人々に興味をもたらししている週刊誌なども、タレントの悪口なるものを多分に取り入れている。このように、私たちの日常生活の中の会話が、ほとんどうわさばなしで終わっているといっても決していいすぎではないであろう。うわさとはいったいどのようなものなのか、どのようにして生まれてくるものなのか、など、普段私たちがなにげなくかわして、見すごしているうわさというものに興味をしめしたのである。

一口にうわさといっても、いろいろなりわさがあつてしかるべきである。たとえば、ある田舎の村で若い二人があいびきをしていた。数日後、その二人のことがうわさになって広まったのである。だが、このようなりわさがたつたおかげで二人は村の中のだれに気がねすることなく公然と会えるようになり、周囲の人々から結婚を認められるようにまで進むのである。このようなりわさは肯定的なりわさといえよう。つまり、うわさになった人は周囲から良くみられると同時にその人自身良い方向に向っていく。いいかえれば、肯定的なりわさは促進的な役目を果たしているといえる。反対に、うわさがたつたために周囲の人々から村八分的存在にされる否定的なりわさは抑制的なものとして考えられる。そして私たち日本の社会においては、むしろ抑制的な役目をもつ否定的なものが多い。では、いったいこのようなりわさはどのようにして生まれるのか。なにがうわさを生みだしてしまふのだろうか。

うわさというものは、何らかの事物に対してたてるものよりも、常に人間というものを対象にしているといえ

る。そして、うわさを立てるといふことは、その人間に対して、私たちは何らかの関心なるものをもつからである。このような事は私たちの日常生活を考えてみてもわかる。つまり、何かかわったことをしたり、えらくなったりした人に対して私たちはすぐに興味を示すといった外面的な好奇心なるものをもっているのである。又、このような好奇心をもつと同時に、その反面、常に自分というものを大事にし、世間の人々から笑われるのはいやだ、バカにされたくない、恥はかきたくない、だから私も良く思われたいといったような閉鎖的な意識をもっているのである。

では、このような閉鎖的な意識をもつと同時に、一方においては好奇心なるものを示すのはなぜなのだろうか。どのようなところから生まれてくるのか。ここで、日本の社会構造をみてみるに、それは無数の小さな閉鎖された社会集団というものを作りながら、その中で権力者たるものを頂点として義理人情というものでつなかれ、このような関係が閉鎖された社会の中の末端の人達にまで達するようになっていくピラミッド型の主従関係（タテ関係）をもっているといえる。



たとえば、ここで一つの閉鎖された社会をとりあげて考えてみるに、或る権力者（ボス）を頂点とするA集団とB集団があったとする。この場合、A集団の人達もB集団の人達も上からの働きかけで個人個人おかわれているといえる。そして、A集団とB集団のヨコの関係というものはあまり強くない。常にお互いを気にして、競争心なるものをもっているのである。A集団は、なんとかB集団をけあとして良くなるうという意識をもち、一方B集団においても同じような意識が生まれるのである。このようなことは私たちの身のまわりを考えてみても、たとえば受験受験とさわいでいる学校などにおいても、自分と同じくらい、あるいは自分よりもすぐれているものがあれば、なんとかして友達が怪我をしたり、病気になるって勉強ができないかなどと考えるものである。又、会社などにおいても自分よりもすぐれている人、あるいは競争相手

の同僚などが転勤（左遷）をしたりすると、転勤しなかった者は競争相手がひとり減ったと喜ぶようになる。

一方、転勤した者は、とても不安になってしまふようになる。このような社会構造の中における人間の意識関係というものは、非常に複雑になるといえる。ましてや、社会構造をはみだした場合は、その個人は村八分的な存在になり、周囲の人々から白眼でみられたり、けいべつされたりするようになる。つまり、こうした社会構造内にあつては、自分のわくというものを守りながらも常に他の人のことを気にするといった意識なるものが生まれてくるのであり、こうして生まれる意識が今度は逆に社会構造に働きかけ、それを強固なものにする。このように、社会構造と意識構造というものは、相互に働きかけるものとして考えられる。したがって、閉鎖された社会の中でタテの主従関係を重視する日本の社会構造なるものの中の私たち日本人の意識構造というものは、うわさなるものを生みだす人間関係を作りだしているといえるのである。

このようにして生みだされるうわさというものの範囲は、自分の範囲（わく）の中で個人がもっている志向性の広がりぐあいによって決められるといえる。

たとえば、よく世間で使われている言葉の中に「旅の恥はかきすて」というものがある。つまり、日常生活の中では何らかの行動をするにしてもつましくしているのに、いざ旅に出かけると、電車の中であっても、宿の中であっても平気で今ままでみられなかった行動なるものをするようになる。このようなこともその個人が自分の日常の生活の範囲外と考えるからできるのであろう。つまり、うわさというものは私たちの現実の生活の反映であるとともに、また、逆に考えて生活というものに対して常に反映しているといえよう。マスコミが発達している現在にあつては、有名人、芸能人なども私たちの意識の中に入り込んでゐる。だからこそ、週刊誌などに多分にタレントの悪口などがかけられたりすると、それを話題にして友達などと話すのである。

では、うわさはどのように伝播していくのであろうか。たとえば、こう云う例がある。キング夫人のうわさ話であるが、A夫人からB夫人……J夫人まで伝わっていく間に健康だったはずのキング夫人が最後には死ん

だものとして話されるのである。このようにうわさというものは、話す人から聞く人へと次から次へ、人々の口をへて伝わり、ある個人によって受けとられた話しが、もう一人の個人に伝えられると、その個人のもっている興味や関心、あるいは態度というものに関連して新たに作りかえられるようになるのである。つまり、うわさというものは、人物やその人の行為への関心と、その結果としてのうわさに対して示す関心の度合によって強く左右されている。このことは、うわさの伝わる速さについてもいえることである。度合が強ければ強いほど速さは速くなるのである。週刊誌の売れゆきもタレントの悪口などに対する興味、関心があればあるほど速くなっていくのもこの一つのあらわれであるといえる。このような関心の度合というものはタテ社会組織の中に、たとえば先のA集団とB集団との間にみられるところの利害関係、競争心の強さの意識に反映するものであって、さらに生活範囲の密度によって規定されたものである。たとえば、農民たちが田舎に散らばって生活している時には、耳を傾けなかつたりわさ話しも、農民たちがいったん市場にでも集まると、急に信じこみはじめるのである。点々としているところと、凝集して人々が生活しているところでは、後者の方が他人を強く意識しているといえる。つまり、コミュニケーションというものが相互に行なわれていない所においては、うわさは当然たえないといえる。タテ関係を結びつけるきずなは先にのべたような義理人情、温情的、情緒的なものである。だからこそそこに生じる人間関係は、はだとはだとのふれ合い（スキンシップ）ということばであらわされるようなもの、つまり、精神的なスキンシップによる密着性であるといえる。このようなことから家族的であるなどのような関係が小集団（企業）にいわれる。そこでは、親と子の密着的なつきあいが本質的なものとしてある。そのような関係をもつ社会というものの中で生きる人間は他者に対して依存的になるといえる。先にのべたコミュニケーションとはこのような人間関係のことであり、このようなコミュニケーションから日本におけるうわさというものが生まれているのである。

以上のべてきたことから、うわさというものは、人やその人の行為に対する関心であるところの外面的志向性

と、常に自分というものを大事にし、恥はかきたくない、世間の人に笑われるのはいやだ、などといったような閉鎖的意識としての内面的志向性との意識の複合物といえる。つまり、このような意識の中から世間体を気にし、よい評判を得ようとする。又、自分だけはある人とはちがうのだというような世間に対していつわる虚偽意識なるものが生まれてくるということである。

したがって、うわさというものは、コンプレックス、すなわちある場合には劣等意識、又、ある場合には優越意識から生じつつ、しかも両者を、その一方を強く、その他方を弱く、あるいはその逆の形で含みもつものとして成り立っているといえる。

ところで、日本の社会構造の中にみられたタテ関係では、常に一方的に上から下へという方向をとっている。このようなことから日本の社会におけるうわさというものは、抑制的な役目をもつ否定的うわさが多くなるのも必然的である。しかし、うわさには否定的なうわさだけでなく、ただのひまつぶしのものも日本には多い。そうしたうわさは、タテ関係の秩序（先にのべた温情的コミュニケーション）にしたがっているかぎりにおいては、その中の個人は安定しているので、その安定をくずさない限りにおいて生じるといえる。こうして、うわさには人の足をひっぱって不幸にまでおいやるうわさから、ただのひまつぶしのためのうわさといった具合のうわさに至るまで色々の度合があり、それは、外的志向性と内的志向性の二つの意識の強さというものによって決められてくるのである。

ベネディクトの「菊と刀」において、日本が恥の文化といっているのも、このような点からもうなずけるのである。

以上のべてきたように、うわさを研究して気がついたこととして、陰口、悪口とうわさとの比較などもしたら良かったようにも思われるが、又、日本の社会をタテ関係だけをみるのではなく、ヨコの関係から見えていったとしたら、うわさの源についての考え方も変わってきたように思われる。更に、この論文はあくまでも仮説であるが

これをもとに調査を試みたならば、うわさというものをさらに深く研究することができたように思われる。

参考文献

- 梅棹忠夫・多田道太郎編 論集 日本文化3 「日本文化の表情」
中根 千枝 著 「タテ社会の人間関係」
城戸 浩太郎 著 「社会意識の構造」
G・W・オルポート 著 「デマの心理学」
土居 健郎 著 「『甘え』の構造」
リースマン 著 「孤独な群集」
G・タルド 著 「世論と群集」
会田雄次 著 「日本人の意識構造」